



TITLE:

屋久島における野生ニホンザルの生態学的研究(III 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

片山, 一道; 増井, 憲一; 黒木, 一夫; 福田, 史夫; 丸橋, 珠樹

CITATION:

片山, 一道 ...[et al]. 屋久島における野生ニホンザルの生態学的研究(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1977, 7: 36-36

ISSUE DATE:

1977-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162762>

RIGHT:

房総丘陵元清澄山地区におけるニホンザル野生群の分布と生態

福田喜八郎(東大・農)

仲真悟(東農工大・農)

上原重男(京大・理)

1976年の房総丘陵元清澄山地区におけるニホンザル野生群の調査は、7月14日～7月22日・12月18日～12月27日の両期間におこなわれた直接観察と聞き込みによって、断片的ながら群れの動きが把握されたので報告する。

7月の調査では、群れは小屋ノ沢・通称見はらし岩・瀬場沢の3ヶ所をそれぞれ遊動しているところが観察されたが、みな短時間の観察で、夏季の群れの観察の困難さを再確認させられた。また当初予定された連日の取り囲み法による調査も、実行できなかった。

小屋ノ沢を遊動していた群れが、遅く伐採跡地にその姿を現わしたので、群れの一部をカウントすることができた。この群れは、幅200mぐらいに広がって移動していたが、そのうち視界の効く斜面にいたサルは66頭であった。死角になっている斜面に何頭ぐらいのサルがいるのか知るために、群れの中に突入してカウントを試みたが、クモの子を散らしたように走るサルの動きに、とうていカウントし切れなかったが、餌場で見られる群れの集合状態の感触から、上記66頭以外に100頭以上のサルがいることを確信した。従来元清澄山地区における群れのカウント例は、最大で48頭であり、高岩山地区に比べて群れのサイズは小さいと思われていたが、この観察によって元清澄山地区にも150頭を越える個体数を有する群れがあるという新発見が得られた。

12月の調査では、郷台のクスノキ林に集中している群れと、相ノ沢から林道を横断して東ノ沢へ移動する群れが観察された。また聞き込み調査では、折木沢や黒滝で頻りに群が見られるという1974年以来の秋季から冬季の傾向が今年もみられた。

屋久島における野生ニホンザルの生態学的研究

片山 一道(大阪医大・法医)

増井 憲一(京大・理)

黒木 一夫(九大・理)

福田 史夫(マカク研究会)

丸橋 珠樹(京大・霊長研)

屋久島の照葉樹林帯にヤクザルが多数群連続して自然分布する地域で、1. 各群の年令・性構成を把握して、1974年以来の資料の蓄積とあわせて、地域個体群レベルの、人口動態をとらえること、2. 地域個体群を構成す

る隣接群間での群れ生活の相違と群間関係を調べることを主な目的とした。

調査は、国割岳西斜面で、7/16～8/4まで20日間延べ14人が参加して行なわれた。

本地域の群れの分布は1975年度までの調査で明らかとなっており、ほぼ再確認された。半山を中心とする3群ではかなり正確な年令・性構成をとらえられ、他に2群、不十分ではあるが部分的カウントが記録された。

28種、33種部位の植物性食物が記録された。主要食物4種の変化をみると、イヌビワは調査期間間を通じてよく利用され、アオモジは7月末に急に利用されなくなり、8月初めに熟し始めたアコウらにサルがつき始めると全く利用されなくなった。また7月末よりアカメガシワが熟し始め、8月に入ると主要食物の地位を占めるようになった。食物の中で、*Ficus* 属の占める割合が非常に高いことが特色の一つである。

工事場群と半山群が共通して利用する地域があり、この2群間で重複地域の土地利用に相違があることが明らかとなった。しかし2群間の出会いは観察できなかった。

サブグループング現象については、社会的性比の違う上の2群間でその様相に違いがあることや、泊り場を違えたサブグループングパーティーの翌朝の出会いも観察された。

本地域は、屋久島で唯一ヶ所海岸より大規模に照葉樹林が残っている場所であり、ヤクザルの高密度な自然分布がみられ、ニホンザルの主要生息地であった照葉樹林帯での生活を知る上で不可欠な地域であり、シカや鳥類も多数生息する。植物学的にも重要な本地域の森林と動物の保護が十分になされなければならない。

ニホンザル・ハナレオスにおける社会的出会いの構造

菅原 和孝(京大・霊長研)

群れを離れて単独生活をしているニホンザルのオスの間で生起する“稀れな出会い”の構造を分析することを通じて、オスの対他態度の一般的特性を了解することが本研究の主眼である。調査は宮崎県幸島において60日間行なわれた。調査方法は主に個体追跡法を用い、15頭のハナレオス(7歳～11歳)を計148時間にわたって追跡し、その間に生起する相互作用を全て記載した。

今回の調査と1974年度の調査結果(菅原'75)との比較から、次の3点を指摘できる。1) 前回5～6歳であったオス(12頭)の42%が島外に去っていることから、群れ離脱直後のオスは6～7歳にかけて急激な孤立化と生活空間の改変に向かう傾向が強いと言える。2) 一方、より年長のハナレオス(16頭)の87.5%が現在も島内に